物語理解に及ぼす主人公と読者の感情の類似性の効果

〇米田英嗣・河崎美保・常深浩平・楠見 孝
(京都大学大学院教育学研究科)

key words:物語理解、状況モデル、感情

背景
読者は小説などの物語を理解する際に、状況モデルを構築する（van Dijk & Kintsch, 1983）。その過程において多様な感情が生起すると考えられる。物語読解過程における読者の感情は、主人公への同一化や、登場人物への共感によって生起する心理過程であるとされる（Oatley, 2002）。読者は、登場人物を同一化しやすいほど、登場人物の感情反応をより正確に理解し、解釈をする（Gygax, Garðnham, & Oakhill, 2004）。本研究では、主人公の性格と読者の性格が類似している場合と類似していない場合で、物語の理解がどのように変化するのかを検討した。また、実験1では主人公の感情を推定する課題を、実験2では読者の感情を評定する課題を行った。

実験1
被験者 大学生、大学院生36名（男性20名、女性16名）
材料 60文からなる2つのテーマ（買い物、バスの車内）の物語を作成した。それぞれのテーマにつき、内向の主人公と外向的主人公のバージョンを設定した。10文、20文、30文、40文、50文が主人公の性格が変化する。全体の10種類の中では他の文はすべて同じとした。
手続き 最初にBig Five質問紙（田中, 1996）を行った。次に、文1文ずつコンピュータディスプレイに示し、被験者が最愛に読解した。被験者のベースによって読解した。1文ごとの読解時間は、コンピュータによって計測、記録した。10文終了後に、主人公の感情（怒り、嫌悪、不安、悲しみ、喜び）の強度をそれぞれ7点で評定させた。フィラー課題の後、別の文章を同一の手続きで読解した。示す文章はラテン方程式によってランダムバランスをし、2種のテーマ、2種類の主人公を読解するようにした。通常の読解における感情も検討するために、主人公への感情が示されると、特に促す新手順に「読むように普段に読んでもらう」と教示をした。

結果・考察
読解時間を従属変数として、読者の性格を被験者間、主人公の性格を被験者内要因とした分散分析を行った。読者の性格と主人公の性格の交互作用が有意（F（2.29）=3.63, p =0.04）であり、自分と類似している主人公の読解時間が短かった。このことから、自分と類似している主人公の物語文を読解した場合、状況モデルの構築が容易になることが示唆された。
主人公の感情推定値を従属変数として、読者の性格を被験者間に、主人公の性格を被験者内、評定された感情を被験者内要因とした3要因分散分析を行った（図1）。その結果、2次元の図

図1 性格特性による主人公の感情評定の差異

互作用が有意（F（4,84）=4.19, p <0.05）となった。外向主人公

図2 性格特性による読者の感情評定の差異

られた、外向主人公

結論
自分と類似主人公の場合のほうが、読解時間が短いという。実験1の結果から、主人公の感情推論は文章内容理解にかかわると考えられる。それに対して、自分と類似主人公の場合のほうが、読解時間が長いという実験2の結果から、教示によって自分の感情を喚起するよう促される場合は、読解において感情による抑制機能が働く可能性が示唆される。主人公の感情推定においては読者の性格特性が影響することができる（実験1）。読者が感じた感情には主人公との類似性による差が見られ（実験2）という結果から、主人公の感情推論は物語のオンラインの理解に関わり、読者の感情判断は理解後の評価としてなされた可能性も考えられる。